

研究

保育者からみた子ども理解の視点の分類および その実現度と保育ストレスとの関連

大久保めぐみ¹⁾ 高畑 脩平²⁾ 萩原 広道³⁾

要旨：

本研究の目的は、保育者がもつ多様な子ども理解の視点を探索・整理し、子ども理解のどの側面が保育ストレスと関連するかを調査することである。研究1では、66名の保育者から得た質問紙の自由記述を分析した。その結果、子ども理解の視点として9カテゴリーが見出された。研究2では、73名の保育者に、各カテゴリーの重要度・実現度を尋ね、保育ストレス評定尺度に回答してもらった。その結果、どのカテゴリーも重要だが、その主観的実現度は低い傾向にあり、特に発達の視点や、他者との関わり方といった視点の実現度の低さがストレスと関連していた。作業療法士は、保育者の子ども理解の視点を考慮した上で連携・協働に当たる必要がある。

キーワード：子ども理解の視点、保育ストレス、作業療法士の視点

はじめに

「幼児を理解することが保育の出発点である」¹⁾と言われるように、子ども理解は保育の根幹をなすものであり、関連報告は多数存在する²⁾⁻⁶⁾。子ども理解には多様な側面が含まれるため、この用語の統一的定義はなく、個々の研究でそれぞれに定義づけられている。例えば、『幼児理解に基づいた評価』¹⁾によれば、子ども理解とは「一人一人の幼児と直接に触れ合いながら、幼児の言動

や表情から、思いや考えなどを理解しかつ受け止め、その幼児のよさや可能性を理解しようとすること」を指す。佐藤ら⁴⁾は、子どもの内面への共感性と、子どもの行為から心情等を理解することが子ども理解に当たると述べている。これらの定義では、子どもの気持ちや意図等の内面への眼差しが強調されている。

子どもの内面への共感的理解を基軸としつつ、子ども理解を構成する他の側面に言及した報告も多い。例えば、相浦²⁾は、発達段階を把握した上で子どもの発達を捉え、それをもとに一人一人の個性や思い、考え等を理解することが重要だと指摘している。上山ら⁵⁾は、子どもの姿を捉える知識をもち、子どもとの関わりを通して理解の枠組みを変化させていくことが子ども理解の中核であ

- 1) 大阪総合保育大学大学院 児童保育研究科 児童保育専攻
- 2) 藍野大学 医療保健学部 作業療法学科
- 3) 京都大学大学院 人間・環境学研究科 相関環境学専攻 博士後期課程／日本学術振興会特別研究員DC1

ると論じている。椛島⁶⁾は、保育における子ども理解を「臨床的理解」と「教育的理解」に分類し、前者は一人ひとりの子どもを受容的に受け止め共感的に理解すること、後者はその上に成り立つ、子ども本来の姿を引き出し、育つ力を援助するための視点を有することだと述べている。子ども理解には内面理解に留まらず、発達の視点や、保育者自身の成長・変容といった要素が包含されている。

子ども理解は多面的であるため、日々子どもたちと接している保育者が子ども理解をどのように解釈・実践しているかの在り方も多様であろう。現場の保育者視点で、子ども理解を構成する各側面を整理・提示することは、実践現場における保育者の子ども理解の難しさについての実態把握に役立つと考えられる。

実際に、子ども理解に関する知識や技術は、養成課程や卒後の研修を通して涵養されるが、実践での子ども理解は難しく、多くの保育者は悩みや困難を抱えている⁷⁾⁻¹¹⁾。黒木ら¹¹⁾は、その原因の一つは集団と個のバランスを満たすことの難しさだとし、「個々での丁寧な関わりとクラス全員をみる必要性での難しさを感じていた」と述べている。他にも、子ども理解の実践が難しい原因として、内面理解が保育者の主観や経験に依拠し、的確な理解が難しいこと、発達段階の教科書的知識と目の前の子どもの発達を的確に捉えることとの乖離、といった事柄が挙げられる。このような観点からも、現場レベルでの子ども理解の在り様を類型化し、その中のどの側面が実践の難しさと結びついているのかを解明することは重要といえる。

さらに、子ども理解の困難さは保育ストレスにも関連する。松村¹²⁾は、保育ストレスの要因として、「子どもへの対応」「知識と現場のギャップ」等を挙げている。また、近年は発達障害の傾向がある子どもの理解と対応が保育ストレスに関連するとの報告も増えている。木曾¹³⁾は、未診断の

発達障害傾向児数と保育者のバーンアウトの高さには関連が見られると報告している。

これらの先行研究は、保育ストレスに関する実態把握を行う上で非常に有益である。しかし、多面的な子ども理解のどの側面が、特に保育ストレスと関連するのかを詳細に検討した研究はない。子ども理解を構成する各側面のうち、保育ストレスに関連する特定の側面を明らかにできれば、その点に特化して他職種との連携強化を図ることで、保育ストレスの軽減を達成できるかもしれない。例えば、大久保¹⁴⁾は作業療法士との連携によって保育者の子ども理解・対応に変化が見られたと述べている。

本研究では、①現場の保育者にとって、子ども理解はどのような下位分類から構成されているか、②子ども理解のどの側面が、実践における難しさ、ひいては保育ストレスに関連するのかの2点を明らかにすることを目指す。そのために、保育者がどのような視点で子ども理解をしているのかについて探索的調査・整理を行い(研究1)、さらに、その中のどの側面の実践の難しさが保育ストレスと関連しているのかを調査する(研究2)。保育者がどのような視点で子ども理解をしているか、また子ども理解のどの視点が保育ストレスと関連しているかを明らかにすることで、保育所等訪問支援等の場面で作業療法士が保育者と連携・協働する際に、保育者をより深く理解し、その上で焦点化すべき点を見定めるための有用な足掛かりが得られると考える。

方 法・結 果

研究1 保育者が子ども理解するときの視点の探索・整理

1. 対 象

2019年6月にN県で実施された「乳幼児期の感覚統合遊びセミナー」に参加した保育者のうち、質問紙に回答した65名を対象とした(有効回答率58%)。対象者の職種内訳は、保育士34名、幼

幼稚園教諭15名、保育教諭15名、保育士かつ幼稚園教諭1名だった。年代内訳は、20代29名、30代15名、40代8名、50代以上13名であり、女性が64名だった。質問紙への回答は、個人が特定されないよう匿名化した上で、保育に関する研究資料として活用されることを書面・口頭にて質問紙配布時に説明した。これに同意する場合にのみ回答するよう強調し、倫理的配慮とした。

2. 手続き

セミナー終了時に、紙面またはwebフォームから質問紙に回答してもらった。現場の保育者が子どもを理解するときどのような視点をもっているのかを探索するために、「『子ども理解』のために、あなたがこれまで重要視してきたのはどのようなことですか。いくつか挙げてください。」という質問項目（自由記述）を分析対象とした。

3. 分析

KJ法¹⁵⁾を参考にしながら、類似する記述同士をグループ化し、記述を階層的に類型化した。グループにはカテゴリー名を付した。一つの記述は一つのグループにのみ属することを原則としたが、内容が多岐にわたる場合には、複数グループへの重複所属を許容した。分類及びカテゴリー名の付与は、保育者（第1著者）と作業療法士・公認心理師（第3著者）の2名で協議を重ねつつ、先行研究に照らして進めた。最終的に得られたカテゴリーを「子ども理解の視点」とした。

4. 結果

得られた回答は合計209件（1人あたり平均3.2件、SD1.1）だった。自由記述を分類・整理した結果、「その他」を除いて9種のカテゴリーが得られた（表1）。

表1 「子ども理解の視点」の分類

カテゴリー名	概要	件数(重複有)
A 子どもの気持ちや意図を理解する	子どもの好きなことややりたいこと、困っていることや苦手なことといった内面を理解したり、子どもの視点に立ったり、子どもの気持ちに寄り添ったりすること。	70 (33%)
B 保育者側の工夫やスキルアップを行う	声かけなど子どもへのかかわり方や、遊びなどの活動設定の仕方を工夫したり、保育者自身が知識の獲得やスキルの向上を図ったりすること。	48 (23%)
C 子どもの特性一般を知る	子どもの特性や性格の一般的な傾向を知ろうとしたり、観察によって子どもの全体像を理解しようとしたりすること。	22 (11%)
D 保護者・職員と協同する	保護者や他の職員、他園との連携をはかろうとしたり、情報収集しようとしたりすること。	21 (10%)
E 個別性を尊重する	ひとりひとりの違いに合わせた関わりをしようとする事。	18 (9%)
F 発達の視点をもつ	子どもの発達・成長の段階を見極めたり、成育歴の情報を集めたりすること。	18 (9%)
G 他者や集団との関わり方を理解する	子どもの他児や大人との関わり方、集団への入り方の特徴について知ろうとすること。	16 (8%)
H 主体性を尊重する	子どもの主体性を重視したり、主体性を引き出したりすること。	10 (5%)
I 行動の背景や理由を探る	行動の背景にある意図や要因について深く理解しようとする事。	9 (4%)
J その他	-	8 (4%)

パーセンテージは、全回答 209 件に占める割合を示す。

研究2 「子ども理解の視点」と実践の困難さ及び保育ストレスとの関連

1. 対象

2020年1月にN県にて実施された「乳幼児期の感覚統合遊びセミナー」に参加した保育者の内、質問紙に回答した73名を対象とした（有効回答率75%）。対象者の職種内訳は、保育士51名、幼稚園教諭11名、保育教諭10名、幼稚園講師1名だった。年代内訳は、20代23名、30代12名、40代20名、50代以上15名、60代3名であり、女性が69名を占めた。質問紙への回答に際しては、研究1と同様の倫理的配慮を行った。

2. 手続き

セミナー終了時に、紙面にて質問紙に記入してもらった。研究1で得られた「子ども理解の視点」の9種のカテゴリー名及び概要を示し、「子どもを理解するための視点について、以下の項目はどのくらい重要だと思いますか」という質問に6件法で回答してもらった（1：全く重要でない、6：非常に重要だ）。これを「重要度」とした。同様に、「子どもを理解するための視点について、以下の項目（重要度と同じ項目）をあなたはどのくらい実践できていると思いますか」という質問にも6件法で回答してもらい（1：全く実践できていない、6：非常に良く実践できている）、これを「実現度」とした。

加えて、保育ストレス評定尺度¹⁶⁾にも回答してもらった。保育ストレス評定尺度は、29項目からなる質問紙であり、ストレスの度合を5件法で回答する（1：ストレス最小、5：ストレス最大）。下位尺度には、「子ども対応・理解のストレス」（10項目）、「職場人間関係のストレス」（6項目）、「保護者対応のストレス」（5項目）、「時間の欠如によるストレス」（4項目）、「給料待遇のストレス」（2項目）、「保育所方針とのズレによるストレス」（2項目）の6つがあり、信頼性・妥当性が調べられている。本研究では、子ども理

解の視点に関連する保育ストレスを調べる目的から、ストレス評定尺度の総得点ではなく、「子ども対応・理解のストレス」の小計得点に分析対象を絞った。

3. 分析

得られた回答の内、欠測値（全データの0.24%）には中央値を代入し補間した。「子ども理解の視点」の重要度及び実現度のギャップをWilcoxonの符号付順位検定によって分析した。さらに、実現度の合計値と、「子ども対応・理解のストレス」の小計得点との順位相関を調べた。次いで、「子ども理解の視点」の各カテゴリーの実現度と、「子ども対応・理解のストレス」の小計得点との順位相関を調べた。順位相関にはSpearmanの順位相関係数を使用し、有意水準は5%未満とした。

4. 結果

「子ども理解の視点」の重要度と実現度

重要度の中央値は全カテゴリーで6と高い値を示した。一方、実現度の中央値は全カテゴリーで4だった。Wilcoxonの符号付順位検定の結果、全カテゴリーで実現度は重要度よりも有意に低い値を示した（図1）。

「子ども理解の視点」の実現度と保育ストレス

対象者ごとに実現度の合計値を算出した。中央値は36、四分位範囲は8.5（32～40.5）だった。また、「子ども対応・理解のストレス」の小計得点の中央値は32、四分位範囲は10（27～37）だった。この変数間には、有意な負の相関があり（ $\rho = -0.299$, $p = 0.010$ ）、実現度が低いほど、保育ストレスが高いという傾向が見られた（図2）。

次に、「子ども理解の視点」の各カテゴリーの実現度と、「子ども対応・理解のストレス」の小計得点との順位相関を調べたところ、「発達の視点をもつ」「他者や集団との関わり方を理解する」の2カテゴリーで有意な負の相関があった（表

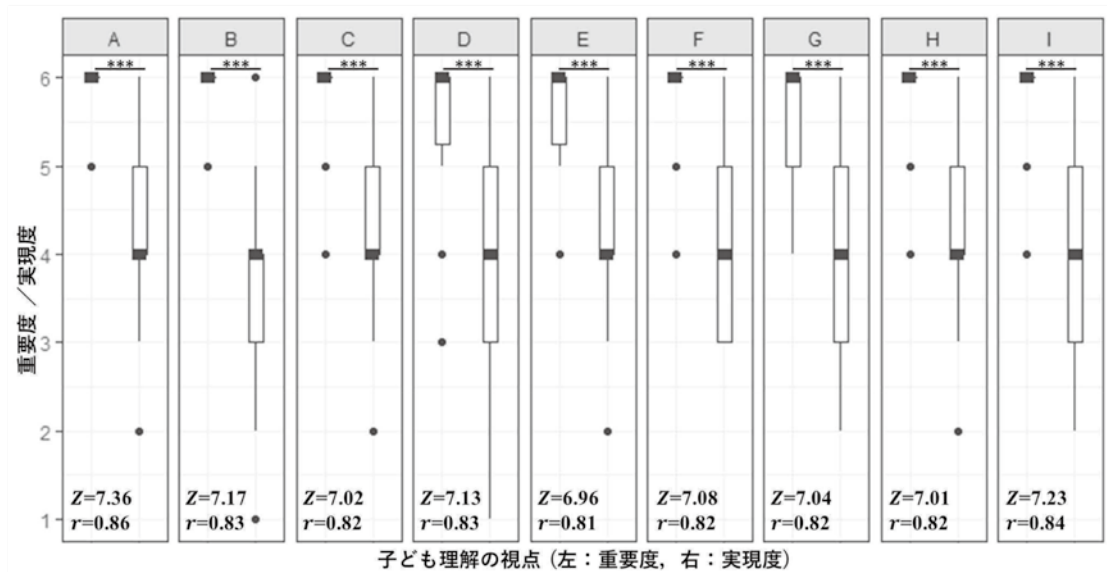


図1 「子ども理解の視点」の重要度と実現度

A~Iのカテゴリーは表1に対応している：A) 子どもの気持ちや意図を理解する, B) 保育者側の工夫やスキルアップを行う, C) 子どもの特性一般を知る, D) 保護者・職員と協同する, E) 個別性を尊重する, F) 発達の視点をもつ, G) 他者や集団との関わり方を理解する, H) 主体性を尊重する, I) 行動の背景や理由を探る. *** p<0.001

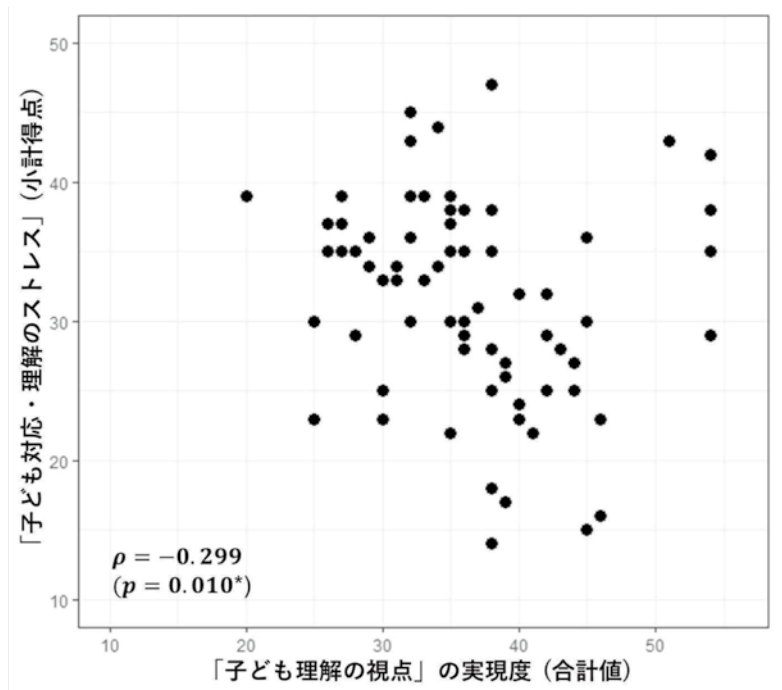


図2 「子ども理解の視点」の実現度と「子ども対応・理解のストレス」との関連 * p<0.05

2). つまり, これらのカテゴリーの実現度が低いほど, 保育ストレスが高いという傾向が見られた.

表2 「子ども理解の視点」の各カテゴリーの実現度と「子ども対応・理解のストレス」との順位相関

子ども理解の視点	子ども対応・理解のストレス	
	ρ	p
A 子どもの気持ちや意図を理解する	-0.184	0.119
B 保育者側の工夫やスキルアップを行う	-0.175	0.138
C 子どもの特性一般を知る	-0.193	0.103
D 保護者・職員と協同する	-0.139	0.242
E 個別性を尊重する	-0.150	0.205
F 発達の視点をもつ	-0.232	0.049*
G 他者や集団との関わり方を理解する	-0.250	0.033*
H 主体性を尊重する	-0.180	0.128
I 行動の背景や理由を探る	-0.207	0.078

* p<0.05

考 察

子ども理解を構成する下位分類

研究1より、保育者が子どもを理解するときの視点として9種のカテゴリーが見出された。これは、子ども理解が多面的であり、現場の保育者は様々な観点から目の前の子どもを理解しようとしていることを示唆する。

最も件数が多かったのは「子どもの気持ちや意図を理解する」だった。これは、多くの先行研究が子どもの内面に対する共感的理解を重視することと一致する¹⁾²⁾⁴⁾⁻⁶⁾。鯨岡¹⁷⁾は「保育の質」を捉えるポイントは、子どもの行動の背後で動く子どもの心の動きを保育者がいかに受け止め、いかに対応するかであるとし、行動の意味の理解を子どもの内面から読み解くことの重要性を指摘している。次いで「保育者側の工夫やスキルアップを行う」が多かった。子ども理解の力点を、子どもを見つめる保育者側の力量に置くことは、保育者自身が子ども理解の枠組みを変容させていくことの重要性を述べた上山ら⁵⁾や、子どもの力を引き出すことを子ども理解の中を含めた椛島⁶⁾の議論と一致する。3番目は「子どもの特性一般を知る」

が多かった。保育者は、児童原簿、保育記録、保育用紙等、年齢ごとの発達段階が書かれたチェックリストを用いて子どもの特性を捉えることが多い(大阪府保育協議会「保育用紙」参照)¹⁸⁾。またSDQ (Strengths and Difficulties Questionnaire)¹⁹⁾や「気になる子どもの行動チェックリスト」²⁰⁾等を用いて子ども理解を試みる場合がある。これら既存の子ども理解の枠組みが、回答件数の多さに反映された可能性が考えられる。

「子ども理解の視点」における重要度と実現度の乖離

研究2より、「子ども理解の視点」について、どのカテゴリーも現場の保育者にとって重要な視点であることが明らかとなった。しかし、高い重要度に比して実現度は低い傾向にあった。これは、保育者が、果たして自分は適切に子ども理解ができているのだろうかと不安に感じることに起因するかもしれない。『幼児理解に基づいた評価』¹⁾には、「幼児の生活する姿から、その幼児の心の世界を推測してみる。推測したことを基に関わってみる。関わりを通して幼児の反応から新しいこ

とが推測される」とあり、子どもの心を推測することの重要性が繰り返し強調されている。しかし、子どもの心の推測は、実際には保育者の主観によるところが大きく、その推測の妥当性を判断する指標が存在しない場合が多い。そのため、自身の子ども理解の在り様に対して不安を感じてしまう保育者が多く存在している可能性がある。

客観的指標に基づく子ども理解の方法として、近年は感覚特性や行動の分析等が提案されている^{21) - 23)}。作業療法士の小松²¹⁾は「人の行動には必ず理由がある」とし、子どもの行動の理由に仮説的説明を付与することで、どのように子どもに対応したら良いかの根拠や指針が得られると述べている。また、濱田²²⁾は、「行動特性と認知特性の関連性」を整理することが重要だと述べており、「気になる行動」の背景にある子どもの認知特性を分析することが、適切な支援に繋がると主張している。このように、子どもの行動の背景を読み取り、より深い次元で子どもを理解する態度は重要だと考えられる。しかし、保育現場においては、子どもの発達等についてできる・できないのチェックに留まり、「不器用」「言葉が遅い」等表面的な理解になってしまう場合が少なくない。実際に、本研究で得られた「子ども理解の視点」でも、「行動の背景や理由を探る」に分類される記述は最も件数が少なかった。子どもの行動特性を表面的に理解するだけでなく、なぜそのような行動をしてしまうのか等、背景にある認知特性を理解することが保育者にも必要だと思われる。

「子ども理解の視点」の実現度と保育者のストレスとの関連性

研究2より、「子ども理解の視点」の実現度が低いほど、「子ども対応・理解のストレス」が高いことが示唆された。さらに、9種のカテゴリのうち、「他者や集団との関わり方を理解する」「発達の視点をもつ」の2項目の実現度が低いほど、保育ストレスの得点が高かった。

保育現場において、他者や集団への関わりの中でトラブルが生じる場面は多い。しかし、渦中にある子どもを個々に理解し、その理解に基づいて対応することは容易ではない。これは、「集団運営と個への配慮の両立」に関する難しさであり、先行研究でも繰り返し指摘されてきたことである^{11) 12) 24)}。加えて、問題が生じやすい場面であるにもかかわらず、具体的な対応手段が少ないことも、保育ストレスが高まることと関連しているだろう。赤田¹⁶⁾は、「気持ちが分からない」「必要な援助が分からない」という保育者の声を紹介しており、子ども理解やその後の対応のための具体的な方法が見つからないことが、保育ストレスの原因になりやすいと指摘している。

また、発達の視点をもって子どもを理解することの難しさも、保育ストレスと関連していることが本研究から示唆された。発達の視点は、子ども理解の先行研究の中で頻繁に言及されてきた視点である^{2) 12)}。加えて、上述の通り、保育現場では発達段階が示されたチェックリストを用いて子どもの発達を捉えることが多い。これらの事実によらずと、保育者は発達の視点を十分に有しているように思われる。しかし、チェックリストを通して、子どもが今どの発達段階にいるのかを把握することができたとしても、生活年齢に相当する課題への取り組みに困難が見られた場合に、その理由を分析・解釈することができるとは限らない。そのため、発達の視点を子ども理解やその後の対応に有効に活用できず、それが保育者の悩みやストレスに繋がる可能性が想定される。

保育者・作業療法士の連携・協働の在り方に関する提言

保育ストレスを軽減するための方策の一つは、子ども理解に関する複数の視点を、実践と結びつけながら保育者自身が学び、深めることだと考える。実際に、大久保¹⁴⁾は、保育者が作業療法士と連携することで、保育者の子ども理解が深まり、

子どもの行動の理由が分かることで、具体的な対応方法が分かるようになったと報告している。作業療法士の視点は、保育者には馴染みのないものが多いが、多様な側面から子ども理解ができることで、「困った子ども」ではなく「困っていたのは子どもの方であった」という気づきに繋がる。子どもの行動の理由の分析・解釈ができたと感じられたときに、子ども理解の実現度が高まり、その結果、保育ストレスが軽減される可能性がある。

保育者は、保育養成過程や研修を通し、子ども理解の重要性を繰り返し学ぶ。中でも、子どもの内面を理解することが最も重要だとされている。一方で、本研究の結果から示唆されることは、現場の保育者が「内面理解」だけに留まらない多様な側面から子ども理解を試みていること、そして、その中でも保育ストレスに関連する特定のカテゴリーが存在することである。よって、保育者が子ども理解に関する多様な視点を得ることで、ストレスの軽減・緩和を図ることができるかもしれない。従来の「子どもの内面理解」について学ぶことに加えて、子どもの行動の理由を多角的な視点から理解するための枠組みを学ぶ機会が必要だと考えられる。作業療法士による、医学的視点や発達学的視点、さらには子どもが従事する遊び等の「作業」に関する視点は、保育現場において有益であり、実践と結びつけやすい。このような視点を得ることで、子ども理解が深まり、保育ストレスの軽減に繋がる可能性がある。

このように、保育現場に作業療法士が関わることは、有益だと考えられる。酒井²⁵⁾は、作業療法士が地域へ関わるためのモデルとして、「セラピストモデル」「機関同士の連携・協働モデル」「コンサルテーションモデル」「メッセンジャーモデル」「健診参加モデル」の5つを挙げている。これらの多様なモデルにおいて、作業療法士が効果的に保育者と連携・協働するためには、作業療法の視点を一方的に保育者に伝達するのではなく、保育者がどのような視点で子どもを理解し、さら

に保育者がどのような点でストレスを感じやすいかを理解した上で、伝える情報と伝え方を柔軟に選択することが望ましい。

本研究の限界

本研究の対象者は、「乳幼児期の感覚統合遊びセミナー」の参加者であり、子ども理解について一般的な保育者よりも意識が高かった可能性がある。本研究の結果が、保育者一般の傾向として解釈可能かという点については、今後より大規模に調査を行い検証する必要がある。なお、セミナー後にデータを収集したことで回答にバイアスが生じた可能性があるが、セミナーは「感覚統合」に特化した内容であり「保育者にとっての子ども理解」そのものを扱ったものではないため、セミナーの回答への影響は限定的だったと考えられる。

本研究では、自由記述を対象に、子ども理解を構成する下位分類を探索・整理した。これをより一般化するためには、因子分析等の統計解析を行う必要がある。本研究はそのための第一歩として位置づけられるため、子ども理解を構成する各カテゴリーは暫定的である。

本研究では、子ども理解を構成する各側面と、保育ストレスとの関連性を相関分析によって調べた。しかし、子ども理解の実現度の低さが保育ストレスの高さに繋がるのか、或いは保育ストレスの高さが子ども理解を困難にしているのか、その因果関係は明らかでない。今後は、保育者向けの研修等を通じた介入研究によって、これらの関連性の因果についても検討を深める予定である。

結 論

本研究では、保育者がもつ多様な子ども理解の視点を探索・整理し、子ども理解のどの側面が保育ストレスと関連するかを調査した。保育者から得た質問紙の自由記述を分析した結果、子ども理解の視点として9種のカテゴリーが見出された(研究1)。さらに、各カテゴリーの重要度・実

現度を尋ね、保育ストレス評定尺度に回答してもらった結果、どのカテゴリーも重要だが、その主観的実現度は低い傾向にあり、特に発達の視点や、他者との関わり方といった視点の実現度の低さがストレスと関連していた(研究2)。保育者がどのような子ども理解の視点を持ち、そのうちのいずれが保育ストレスに関連しているかを理解することで、作業療法士はより効果的に保育者と連携・協働することが可能になる。

引用文献

- 1) 文部科学省：幼児理解に基づいた評価。2019.
- 2) 相浦雅子：子ども理解に関する一考察。別府大学短期大学部紀要37：59-66, 2018.
- 3) 清水桂子：保育の総合的指導における子ども理解の視点。北翔大学短期大学部研究紀要57：73-81, 2019
- 4) 佐藤有香, 相良順子：保育者における幼児理解の視点。こども教育宝仙大学紀要5：29-36, 2014.
- 5) 上山瑠津子, 杉村伸一郎：保育における子ども理解の研究動向－保育者の認知過程の視点から－。幼年教育研究年報40：61-71, 2018.
- 6) 椛島香代：保育における幼児理解のあり方－保育学科学学生の幼児理解の実態分析を通して－。文教学院大学人間学部研究紀要10(1)：69-82, 2008.
- 7) 加藤由美, 安藤美華代：保育者のメンタルヘルスに関する国内外の研究の動向と展望－学校教員を対象とした研究を参考に－岡山大学大学院教育学研究科研究集録159：1-10, 2015.
- 8) 宇佐美尋子, 西智子, 高尾公矢：保育者のストレスに関する研究－女性企業従業員との比較検討－。聖徳大学研究紀要 聖徳大学 26 聖徳大学短期大学部48：1-7, 2015.
- 9) 竹澤大史：発達障害のある子どもを担当する保育者を対象とした研修プログラムの効果測定を試み。和歌山大学教職大学院紀要 学校教育実践研究4：29-34, 2019.
- 10) 井上和博, 河内山奈央子：発達障害児に関わる保育士・幼稚園教諭の「不安や困りごと」～作業療法士の視点から～。鹿児島大学医学部保健学科紀要22(1)：31-38, 2012.
- 11) 黒木晶, 前田亜由美, 坂田和子：保育に対する保育者の葛藤に関する研究動向－「身近な人と気持ちが通じ合う」と「人間関係」「言葉」「身近なものに関わり感性が育つ」と「環境」「表現」を中心に－。福岡女学院大学大学院紀要 発達教育学4：37-40, 2017.
- 12) 松村朋子：保育者のストレスに関する文献レビュー。大阪総合保育大学紀要10：203-210, 2016.
- 13) 木曾陽子：発達障害の傾向がある子どもと保育士のバーンアウトの関係－質問紙調査より－。保育学研究51(2)：199-210, 2013.
- 14) 大久保めぐみ：作業療法士との連携による保育者の子ども理解－子ども地域支援事業の調査から－。大阪総合保育大学紀要12：165-178, 2017.
- 15) 川喜多二郎：発想法改版－創造性開発のために。中央公論社, 2017.
- 16) 赤田太郎：保育士ストレス評定尺度の作成と信頼性・妥当性の検討。心理学研究81(2)：158-166, 2010.
- 17) 鯨岡峻：エピソード記述を通して保育の質を高める。保育学研究47(2)：133-134, 2009.
- 18) 大阪府保育協議会：保育用紙・保育記録<2020.7.15アクセス>
<https://www.ans.co.jp/u/osakahoiku/publishing/youshi.html>
- 19) Goodman R: The strength and difficulties questionnaire: a research note. Japanese Child Psychol Psychiatry 1997, 38：581-586
- 20) 本郷一夫, 飯島典子, 杉村僚子ほか：保育の場における「気になる」子どもの保育支援に

関する研究. 教育ネットワーク研究室年報
5 : 15-32, 2005.

- 21) 小西紀一監修, 小松則登編著: 発達OTが考える子どもセラピーの思考プロセス. メジカルビュー社: 48, 2016.
- 22) 濱田匠+HON@ASI. 発達障害の評価と日々の臨床の流れ. 小西紀一, 小松則登, 酒井康年(編), 子どもの能力から考える発達障害領域の作業療法アプローチ第二版, メジカルビュー社, 39-40, 2018.
- 23) 丹葉寛之: 幼児期の行動解釈に関する研究. 大阪総合保育大学大学院博士論文, 2015.
- 24) 久保山茂樹, 齊藤由美子, 西牧謙吾ほか: 「気になる子ども」「気になる保護者」についての保育者の意識と対応に関する調査. 国立特別支援教育総合研究所 研究紀要36: 55-76, 2009.
- 25) 酒井康年. 地域作業療法の役割と目指すこと. 小西紀一監修, 酒井康年(編), 発達が気になる子どもを地域で支援! 保育・学校生活の作業療法サポートガイド. メジカルビュー社, 91-92, 2016.

Nursery teachers' perspectives for understanding children and the relationship between their achievement and childcare stress

Megumi Okubo ¹⁾ Shuhei Takahata ²⁾ Hiromichi Hagihara ³⁾

1) Megumi Okubo, Osaka University of Comprehensive Children Education Graduate School

2) Shuhei Takahata, Aino University Department of Medical and Health Science, Department of Occupational Therapy

3) Hiromichi Hagihara, Department of Interdisciplinary Environment, Graduate School of Human and Environmental Studies, Kyoto University; Japan Society for the Promotion of Science

Abstract

This exploratory study classified nursery teachers' perspectives of understanding children, and investigated the associations between the subtypes of nursery teachers' perspectives and mental stress. In Study 1, we surveyed 66 nursery teachers and categorized their free descriptive answers regarding their understanding of children into nine perspectives. In Study 2, 73 nursery teachers reported the extent to which each perspective was important and achieved. They also completed the Nursery Teacher's Stress Scale. The results indicate that nursery teachers' subjective achievement in understanding children was negatively correlated with mental stress. In particular, teachers' perspectives about children's development and their social interactions were significantly associated with their stress levels. Based on these findings, occupational therapists should be encouraged to better understand nursery teachers' perspectives to ensure more effective interprofessional collaboration

Key words : perspectives for understanding children , mental stress , occupational therapists' perspectives